

レーザーコンパス

英国光センサ協力協会雑感

大塚 喜 弘*

Yoshihiro OHTSUKA*

2月の末に、英国光センサ協力協会 OSCA (Optical Sensor Collaboration Association) の日本視察団の5名の方々にお目にかかる機会があった。団長格のピーター・マクギーイン博士は、コンプトン・コンサルタント最新技術管理市場開発の担当者で、OSCAの会長兼取締役という肩書の持主だった。

御承知のように、1970年代以降精力的に研究開発が進められてきた通信用光ファイバは、極めて急速な発展を遂げ、1980年代には実用化の域に達し、光ファイバ通信の幕明けとなった。一方、その研究開発の進展につれて、光ファイバの多彩な物理的性質が脚光を浴び、光通信本来の目的から派生した光ファイバセンシングという新しい科学計測の分野を誘発するに至った。このような背景が一つの契機となって、逸早く、英国では産業界と大学の協力のもとで、レーザーとファイバを中心に据えた光センサ協力協会が設立されたということらしい。いろいろ話を承っているうちに、筆者の感じた事を紹介したい。

いわゆる国際的に認知されている学術雑誌には、最近、日本人の書いている論文が多くなっていることは、彼等も認めている処なのだが、

大きな国際会議などを除いた平素の日本の学会活動については、彼等は全く無知だと言って良い。これは、日本の学会活動がほとんど国内に限られてきたという背景に起因すると思う。日本語による日本人の学会は外国人には理解できないので、諸外国には知らせる必要がないという暗黙の共通認識が我々にはあるのであろうか。ちなみに、欧米で刊行されている学術雑誌のカレンダーには、諸外国で開催される各種の研究會から国際会議に至るまで幅広く紹介されているが、日本で開催される主要国際会議を除けば、日本の主要学会の学術講演会ですら上記のカレンダーには掲載されていないのである。

本誌15周年記念会誌の巻頭言で、山中千代衛先生は「大学人として受けとめねばならぬ重大クレームは“Japan is a Science Eater”の一言ではなからうか。今、我々がしなければならぬ仕事は、経済力の向上をはかることでなく、文化・科学の分野で世界に貢献することである。」と力説されている。日本語の国際性に問題があるにせよ、せめて、レーザー学会も含めた日本の主要学会の学術講演会ぐらいは、国際的に認知せしめるためにも、上記カレンダーに記載して

*北海道大学工学部 (〒060 札幌市北区北13条西8丁目)

*Faculty of Engineering, Hokkaido University (Kita 13-jyou, Nish 8-Chome, Kita-ku, Sapporo 060)

貰う努力が必要ではなからうか。

さて、春の新学期は企業のリクルート関係の責任者が、大塚大学を訪れて来る季節でもある。筆者でさえ、是非とも光関連の勉強をした学生を推薦して欲しいという強い要望を聞かされ続けている。結論を言えば、レーザーを頂点とする光科学技術を総合的に勉強できる学部が国立大学には無い上に、現状の電気・電子系および

物理系の学科では対応が十分でなく、この分野の学生の絶対数が不足しているのである。

OSCAのような英国型協力協会といった組織が良いか悪いか、議論は別にして、光科学技術分野の産業界と大学との協力体制を整えて、国際的な対応から人の養成まで含めた幅広い将来展望を築く時期が、まさしく、到来していると感じる次第である。